

平和の全人的理解 に向けて ～20世紀の旅～



ドルトン・ライマー 著

1st Edition : [Piyo ePub Communications](#)

Oct. 5. 2011.

講演：福音聖書神学校にて 2003.4.21.

表紙の写真：能勢川キリスト教会

目次

「平和」とは	4
戦争と平和	4
文化の変化が争いの温床となる	6
メノナイト諸派と文化	8
70年代の革新	10
シャロームの約束	11

BIBLIOGRAPHY

13

ドルトン・ライマー先生 セミナー

13

「平和」とは	
戦争と平和	
文化の変化が争いの温床となる	
メノナイト諸派と文化	
70年代の革新	
シャロームの約束	

BIBLOGRAPHY

ドルトンライマー先生 セミナー

平和の全人的な理解に向けて

～20世紀の旅～

Toward a Holistic Understanding of Peace: The Twentieth-Century Journey

平和の全人的な理解に向けて
～20世紀の旅～



ドルトン・ライマー

(Dalton Reimer : フレズノ・パシフィック大学教授)

Fresno Pacific University

[Center for Peacemaking and Conflict Studies](#)

「平和」とは

「平和」とは、メノナイトのみならず、広く世界においても、20世紀に探求し続けられるバリュー（価値）であった。メノナイトでは、平和は16世紀以来、アナバプティスト（再洗礼派）の始まりから、核となる聖書的価値である。それは、メノナイトの景観の一部であり、常に目前に置かれた景色ではなくとも、その裏に広がる風景の部分なのだ。何らかの混乱が起こるときに、平和が前景として語られることになる。20世紀は、多くの混乱に満ちていたので、世紀の大部分を通して、平和の問題が前景に踊り出た。しかしそうなったのは、私がここで記するように、それぞれ別の理由もある。

しかし、このエッセイの目的は、特に北米メノナイトに関連づけながら、しかしそれだけではなく、前景として語られる20世紀における平和の概観を提供することである。北米メノナイトの間の、この旅のより詳細な内容を知りたい方は、レオ・ドリージャーとドナルド・B・クレイビルが書いた「メノナイトの平和を作る働き、静寂主義から行動主義へ（1994）」そしてポール・テーブズの「アメリカ社会のメノナイト諸派1930-1970（1996）」を参照されたい。

戦争と平和

言うまでもなく戦争は、20世紀の中心をなす経験である。世紀前半に起こった2つの戦争が、その舞台となった。第2次世界大戦は、広島と長崎に原爆を投下することで、最高潮に達した。そして、このことが核の時代のはじまりとなったのである。20世紀後半の冷戦時代が続くが、その中でも、朝鮮戦争やベトナム戦争という激しい戦いがあった。20世紀の最後の10年は、国同士の争いや内戦から、大量虐殺にまで及び、その状態はまさしく戦争の世紀である。1億人以上の人々が戦争

の結果、命を落とし、その数は、1年に平均100万人以上の人
が亡くなっていることになる。

20世紀の当初、メノナイトの孤立主義の傾向がどうあれ、徴
兵は戦争問題に関するのを避けることを不可能にした。これまでの
歴史の中で、メノナイトはその歴史的な問いかけの回答を聖
書に求めてきた。聖書は、旧約の研究者フィリス・トリブルの
たとえによれば、それぞれの世代がその問いかけを尋ねる、歴
史の中を旅する巡礼者に例えられる。20世紀の間、戦争は早
い時期から、回避しきれない質問を呈してきた。そして他のク
リスマンと共に、メノナイトも回答を探るために、聖書に立
ち返ったのである。

私の祖父は、第一次世界大戦時に、「無抵抗主義」に自身の
答えを見つけた。この最初の大戦の間、良心的兵役拒否者が徴
兵制度以外の選択がなかった時代、彼は5人の息子を含む一家
で、オクラホマ州から、ブリティッシュ・コロンビア州のバン
ダーフーフに移り住んだ。戦争のために、カナダへ引っ越した
のは、彼だけではなかった。他方、家に留まり、兵役を拒否し
たために、投獄された人たちもいた。そして、中には、軍隊に
加わった者もいた。

第二次世界大戦は変化をもたらした。メノナイトは、戦争の
挑戦に見合った良き備えをしていたのである。故に、歴史を通
しての平和な教会を含む他の人々と共に、兵役の代わりとして
の良心的兵役拒否者への代替職務が、政府当局との交渉の結果
生み出された。

しかし、そうは言っても、メノナイトは、この兵役拒否の選
択を実行に移すことへの、一致団結には至ってなかった。いく
つかの資料によれば、ドリージャーとクレイビルは、第二次世
界大戦中にアメリカとカナダで徴兵されたメノナイト諸派のう
ちの55%だけが兵役拒否の選択をし、残り45%は、徴兵を選

択した。

戦争への対応には、一致していないながらも、戦争は明確な平和への問いかけになっている。そして、これこそまさしく、ここで私が語りたことなのである。目の前にある景色は、その視界を独占する。つまり、目前の問題として、戦争は平和の意味付けを独占するようになった。「平和問題の立場」のような言葉が、この戦争への関連付けを強めた。

メノナイト諸派の前世紀末の調査によれば、ドリージャークレイビルは、81%の回答者が、「仲間の教会員たちは、いまだに、『平和と無抵抗とは、主として戦争への良心的兵役拒否をすること』」と回答していることを示している。1986年のメノナイト・ブレザレン出版の、「子羊の力」が、その点をより詳細に書いている。世紀の末になっても、なお、平和とは、戦争への応答の問題として重く受け取られている。

無論、戦争は、最も意味ある平和の論点として残る。しかし、平和は、戦争への応答以上のものである。このことは、20世紀の後半の間、新たな問いかけが目の前に移ってきたときに明らかになってきた。

文化の変化が争いの温床となる

ノーマン・シャウチェックは、変化は争いの温床であると示唆している。過去半世紀の間、文化的変化によって生じた争いの多さが、彼の主張を正当と認めているようである。まさしく、世紀後半の間、目前の平和の問題として、文化が戦争の主要な競争相手であった。先の論点であった、徴兵と戦争と同様に、メノナイト諸派は、文化の問題を避けることができなかった。北米でのメノナイトの経験を解説する人たちが記していることによれば、メノナイト諸派は、戦争に関する経験のお陰で、文化との巾広い関係に導き入れられていった。第二次世界

大戦の間、兵役拒否か応召かという選択を通して、メノナイト諸派は、彼らのより馴染みのある伝統的な田舎の環境をはるかに越えて、自分たちが新しい環境とコミュニティーの中にいることを発見した。ここに彼らは、文化とのより広い関係に導き入れられ、そこから戦後も、退くことはなかったのである。

私自身の経験については、1950年代の初頭にハイ・スクールで過ごし、1955年に卒業。最上級の学年の時、私は、アナバプティストの伝統における無抵抗主義について研究論文を書いた。徴兵は実施されており、私は良心的兵役拒否者として登録することを確信していたので、この歴史について興味を抱いた。また、良心的兵役拒否の立場は、地域の徴兵委員会によって、自動的に授けられるわけではなかった。つまり、その主張を弁護することが必要であったのだ。戦争に対する、アナバプティストの応答の幾ばくかを知る事は、有益であった。

徴兵や戦争が未だ私の関心に挙がっている一方で、何か別のものがより大きな文化の中に生じていた。変化はそこかしこに広まっていた。例えば、1952年に、アメリカで、最高裁は、映画を、言論の自由に関する憲法修正の下に入れた。それは、性、暴力の表現が、かなり広範に渡って解禁されるきっかけとなる。1953年、アイゼンハワー大統領は、テレビカメラの前で就任式をした。しかし、競争相手がないわけではなかった。前日、1月19日に、ルシール・ボールは、自分がテレビの「ルーシー」という役柄で、出産することになっていたのであるが、実生活でもドラマの筋書き通りに、男児を出産した。68%以上の全米のテレビが「アイ・ラブ・ルーシー」にチャンネルを合わせており、先の大統領就任の番組と競っていた。

新しいテレビ文化が、出現しつつあった。同年、雑誌「プレイ・ボーイ」の初版が、性的革命に向かったの運動の牽引力となった。そしてまた同じ年、「ウーマン・リブ」という言葉

が、アメリカで初めてフランス語の翻訳本に掲載された。それからエルビス・プレスリーやロックン・ロールの新しい音楽が出現。ここに、性的革命、ウーマン・リブ、新たな語り部としてルーシーのような新しいテレビ文化、新たな音楽文化の種が生まれた。そして、1955年、私が、ハイ・スクールを卒業して、テーパー大学での1回生を始めた年に、ローザ・パークスが、モントゴメリーでバスの座席を立つのを拒否し、公民権運動が始まった。

1960年代になっても、1950年代の文化の変化は続いていた。その10年の間に、少なくとも、アメリカでは、相当な理想主義で始まった。ケネディー大統領が、1961年の就任演説を、奉仕への呼びかけをもって、以下のように締め括った。「あなたの国が、あなたのために何をしてくれるかなどと尋ねてはいけない。あなたがあなたの国のために何ができるかと尋ねなさい。」そして、彼は、平和部隊のようなプログラムを通して、国のために貢献できる機会を提供した。しかし、その10年間は、ケネディー大統領に続いて、マルチン・ルーサー・キング牧師、そしてロバート・ケネディーが暗殺され、理想主義から、混乱とフラストレーション（欲求不満）の時代へと変わって行った。アメリカの町は、人種差別の緊張が爆発し燃えていた。そしてベトナム戦争は、遠い対岸の戦争ではなく、反戦運動が高まりを見せ、アメリカの路上は戦争状態であった。

メノナイト諸派と文化

1960年代の間、戦争と文化という2つのテーマは、不安定と混乱がミックスされた状況にあった。その両テーマのミックスは、教会を含め、人々にとって、戦争と文化のどちらに応答しているのか、その見極めを困難にしていた。長髪が、反戦の世論と融合する時、どちらの問題なのか？ ベトナム戦争後も、

戦争と文化は、目前の平和の問題として続いている。しかし、文化が抜きん出てきている。

世紀の後半が始まり、文化の論点について、クリスチャンの思想家たちの間で論じるための舞台が、「キリストと文化（1951）」というセミナーとして、リチャード・ニーバーによって用意されたのは意味深いことだ。彼は、5つの可能性を示した。「文化に対抗するキリスト」「文化のキリスト」「文化を支配するキリスト」「逆説関係にあるキリストと文化」「文化を変革するキリスト」。この世紀の中間点において、彼は、メノナイト諸派が「文化に対抗するキリスト」の例であるということを、以下のように見ていた。「メノナイト諸派は、最も純粋な態度を呈してきた。というのも、彼らは、あらゆる政治参加を放棄したのみならず、兵役につくことを拒否した。そして、経済や教育については、彼ら流の習慣と規律に従った」(56)。

ニーバーの特徴付けは、過去半世紀に渡って、メノナイトの思想家たちが、彼らの理解するキリストと文化の関係について、より明確で、納得の行く説明をしようとする動機付けをしてきた。最近では、デュエイン・K・フリーゼン（2000）が、「キリストと文化」というのは、この問題を考える枠組みとしてすら、誤っているのではないかと示唆している。キリストが受肉されたということは、常に文化の関与があることを意味する、したがって、我々は文化の別な見方について話し合う方が良いのかも知れない、と彼は語る。

キリストが文化の中に受肉されたという見方は、文化の変化と、その変化がもたらす衝突と合わせて、戦争を問題にするよりも、より大きな、平和を作り出す可能性へとドアを開けることになる。第二次世界大戦後の時代の苗床から、1950年代の急速な文化と政治の変化、そして、1960年代の爆発的な激動

をもたらし、ついに1970年代に、平和をつくる働きの新しい方向性に導いた。争いの問題は、もはや遠く対岸の戦争ではなかった。争いは、北米の目抜き通りにも存在し、無視できないものになってしまった。町で起こっている争いが、やがて教会にも入ってきた。音楽や礼拝のスタイル、教会の働きと婦人、性、その他の問題は、無視する事はできなくなった。文化と社会の変化が、表面に出てきた。そして、かかわるべき新たな問題が出てきたのである。

70年代の革新

1970年代は、実り豊かな革新の時代である。「争いの解決」が、平和をつくる働きの新たな言葉として現れ、やがて「争いの処理」、後には、「争いの変革」という別な表現が現れた。争いを解決することの別な言い方として、「調停」の人氣が高まりつつある。「調停」の応用策が多様化してきた。子供や青年が、学校の校庭で自分たちの争いの調停方法を学ぶ、ピア（同輩）調停プログラムが現れ始めた。自らのコミュニティーから出たボランティアの調停者にそのコミュニティー内の調停役をしてもらうためのコミュニティー調停センターが設けられた。

70年代半ば、メノナイトの中で、「被害者—加害者の和解プログラム(VORP)」が、カナダのオンタリオ州、アメリカのインディアナ州で生まれた。それは、成長した、より大きな、正義の回復のための運動となっている。1979年、メノナイト和解サービスは発足し、その10年後、国際和解サービスとなった。両者とも、より大きな、メノナイト中央委員会(MCC)を背景としている。1984年、ロン・サイダーは、中米、北アイルランド、ポーランド、アフリカ南部、中東、アフガニスタンに派遣し、戦っている人たちの間に、平和裏に立ち入るため

に10万人のクリスチャンを、新たな非暴力の平和維持隊として創設しようと、フランスのストラスブルでのメノナイト世界会議で呼びかけた。そしてクリスチャンの平和をつくるチームは、サイダー氏が心に描いたスケールにまでは及んでいないが、実現の途を見たのである。

1990年代、この平和への取り組みの拡大は、メノナイトの中で、イースタン・メノナイト大学とフレズノ・パシフィック大学での大学院プログラムと新しい平和センターに実現を見た。アメリカとカナダの両国における、メノナイトの高等教育機関においても学部のプログラムとして充実してきている。同様の発展が、世界的にもメノナイトの教育機関の中で現れ始めている。

要するに、1950年代と1960年代の第二次世界大戦後時代の急速な文化と社会の変化は、この世紀の最後の30年間において、大きく広がった平和の働きの可能性に導かれた。ある意味で、この発展は、しばしば「平和」と訳される古代ヘブル語の「シャローム」の聖書的な意味の広範さへの健全な復帰であった。

シャロームの約束

「シャローム：救い(salvation)、正義(justice)、平和(peace)を意味する聖書のことば」という題の本を学ぶと、ペリー・ヨルダーによれば、シャロームは、ヘブル語の聖書では、「物質的・肉体的な事柄を表し」、また「関係」を、そして「道徳的な意味」をあらわしていると述べている。それは、「幸福の状態(well-being)」または、「正しい関係(just and right relationships)」「善の状態(goodness)」を表す範囲の広い語でもあり、それに対応するギリシャ語の「エイレーネー」同様、健全で(whole)、いっしょで(together)、健やかな(well)世

界を表す。

平和の意味を再構築する上で、シャロームということばを参考にすれば、平和をつくる働きを、ヨルダーのいう「救い、正義、平和」のように、より全人的に理解することができる。これは、戦争との関連で平和を理解するよりはるかに深いことである。シャロームとしての平和は、神との平和、人間同士の、その全ての表われ方における平和を含んでいる。文化的に、我々は、平和をつくる働きのより広い理解に向かって動いてきた、またクリスチャンの平和をつくる者として、シャロームという、平和のより広い聖書的な理解の根に、この文化的運動を結びつけるようにした方がよいであろう。

シャロームは、神との関係、人間との関係の全てを含んでいる。人間間の問題としては、教会で、組織で、コミュニティで。そして国内でも、国外でも。この広い平和の理解が、最近改訂された「メノナイト・ブレザレン信仰告白」においても承認されている。そしてこの広い平和の理解が、我々の学校や教会において、少なくとも我々の中の幾人かが取り組んでいるものであり、将来の課題となるものであろう。

(翻訳：岡本信子 監修：藤野純一)

BIBLIOGRAPHY

- Driedger, Leo and Donald B. Kraybill. Mennonite Peacemaking: From Quietism to Activism. Scottdale, PA: Herald Press, 1994.
- Friesen, Duane K. Artists, Citizens, Philosophers: Seeking the Peace of the City: An Anabaptist Theology of Culture. Scottdale, PA: Herald, 2000.
- Niebuhr, H. Richard. Christ and Culture. New York: Harper, 1951.
- Shawchuck, Norman. How to Manage Conflict in the Church. Irvine, CA: Spiritual Growth Resources, 1983.
- Toews, John E., and Gordon Nickel, eds. The Power of the Lamb. Winnipeg, MB: Kindred, 1986.
- Toews, Paul. Mennonites in American Society, 1930-1970. livepage.apple.co.jp Scottdale, PA: Herald, 1996.
- Yoder, Perry. Shalom: The Bible's Word for Salvation, Justice, and Peace. Newton, KS: Faith and Life, 1987.
-

ドルトン・ライマー先生 セミナー

福音聖書神学校にて 2003.4.21.

『“Peacemaking” 平和と和解へのアプローチ（対人関係）』

[参考資料1]

- * このドルトン・ライマー先生の論文は、2003年4月21日に開催された、福音聖書神学校（池田市）でのセミナーの資料として、配布されたものです。

論文を使用される場合は、ご連絡下さい。

著者の了解を得てWEB上に掲載しています。

(編集者：井草晋一 / Piyo ePub Communications / 2011. Oct. 5)